

## **主よ、来てください**

コリント人への手紙第一 16章 10-24節

### **はじめに**

私が月の第二週に説教をさせていただく時は、「コリント人への手紙第一」からお話しています。2017年の4月から、「コリント人への手紙第一」を少しずつ学んできましたが、今日で最後となります。

今日の聖書箇所には、個人名がたくさん出てきます。一人ひとりを取り上げながら、私たちがあるべき姿を学んでいきたいと思います。

### **1. テモテが心配なく過ごせるように**

10-11節には、「テモテ」について書かれています。「**テモテがそちらに行ったら、あなたがたのところで心配なく過ごせるようにしてあげてください。彼も私と同じように、主のみわざに励んでいるのです。だれも彼を軽んじてはいけません。彼を平安のうちに送り出して、私のところに来させてください。私は、彼が兄弟たちと一緒に戻るのを待っています。**」

テモテは、パウロが愛した子どものような存在で、忠実な若い伝道者でした。パウロは、自分がコリント教会に行く前に、まずテモテを遣わし、問題の多いコリント教会を整えようとしたのです。そこでパウロはコリント教会に、テモテがそちらに行ったら、十分な配慮をもって彼を受け入れるようにとお願いするのです。

まず一つは、テモテが「心配なく過ごせるように」ということです。二つ目は、テモテを「軽んじないように」ということです。そして三つ目は、テモテを「平安のうちに送り出すように」ということです。テモテはこの時、三十代半ばぐらいだったと言われます。若い伝道者であるがゆえに、軽んじられる可能性があったのです。しかしパウロは、テモテは「私と同じように、主のみわざに励んでいる」人だと言っています。パウロはコリント教会に、テモテは「主のみわざに励んでいる」がゆえに、彼を重んじ、彼が何の心配も不安もなく生活できるように支えてあげてほしいとお願いしているのです。

ここから教えられることは、教会は「主のみわざに励んでいる」伝道者を決して軽んじてはならないということです。そして、伝道者が何の心配も不安もなく生活できるように、支えなければならないということです。伝道者が生活の上で心配や不安があると、「主のみわざに励むこと」が難しくなります。教会が伝道者を支えると、伝道者は「主のみわざに励むこと」ができるのです。伝道者も、決して教会の支えに甘んじてはいけません。伝道者はいつでも「主のみわざに励むこと」に全力を尽くさなければなりません。

牧師就職式の時に、教会はこのように誓約することが求められます。「**牧師はみことばの宣教によって、人を神の国に導く特権をゆだねられた者です。あなたがたは、そのためにことばと行い**

**によって兄弟を励まし、支えることを誓約しますか**」。牧師は、みことばの宣教によって、人々を神の国に導くことに励まなければなりません。そして教会は、牧師がそれに励むことができるために、牧師を励まし、支える必要があるのです。私たちは、テモテをコリント教会がどのように受け入れるべきかというパウロの序言を通して、牧師と教会の関係を学ぶことができますと思います。

## 2. アキラとプリスカの家にある教会

12節には、「アポロ」について書かれています。「**兄弟アポロのことですが、兄弟たちと一緒にあなたがたのところに行くように、私は強く勧めました。けれども、彼は今のところ行く意志は全くありません。しかし、良い機会があれば行くでしょう**」。

アポロは、雄弁な伝道者で、パウロの後にコリント教会でも牧会した人です。アポロはコリント教会に大きな影響を与えたようで、コリント教会には、「パウロ派」「アポロ派」という分派ができるほどでした。教会には分派があったようですが、パウロとアポロの関係は決して悪くなかったようです。アポロは、今自分がコリント教会に行くと、また分派争いが起こり、教会が混乱することを配慮して、良い機会が来るまでコリント教会に行くことを控えたのでしょう。

アポロを語る上で欠かせないのが、19節に出てくる「アキラとプリスカ」です。19節を見てみましょう。「**アジアの諸教会がよろしくと言っています。アキラとプリスカ、また彼らの家にある教会が、主にあって心から、あなたがたによろしくと言っています**」。アキラとプリスカは夫婦で、コリント教会を開拓する時に、パウロを支えたのです。彼らは、「天幕作り」の仕事をしてながら、自分の家を開放して教会の集会所としていたのです。コリントでは、パウロを自分の家に住ませたりしました。またパウロのいのちを救うために自分たちのいのちを危険にさらすことさえありました（ローマ16:4）。この夫婦は、信徒でありながら伝道者や教会を支える「長老」のような存在であったのでしょう。

彼らは、アポロを教育した人たちでもありました。アポロは確かに雄弁な伝道者でしたが、「福音」についての理解は十分ではありませんでした。そこでアキラとプリスカは、アポロを呼んで「福音」について正確に教えたのです。だからこそアポロは成長して、コリント教会でも大きな影響を与える伝道者となったのです。アキラとプリスカは、信徒でありながら、若い伝道者を育てたのです。

ここから教えられることは、教会には献身的な信徒が必要であるということです。教会は牧師だけではどうにもなりません。献身的な信徒、特に夫婦やクリスチャンホームがいて、教会は支えられ、成長していきます。そして、牧師や若い伝道者は、そのような献身的な信徒に支えられ、教えられながら成長していくのです。教会には、「アキラとプリスカ」のような献身的な信徒、特に「長老」が必要なのです。

## 3. 聖徒たちのために熱心に奉仕したステファナの一家

15-16 節には、「ステファナの一家」について書かれています。「**兄弟たちよ、あなたがたに勧めます。ご存じのとおり、ステファナの一家はアカイアの初穂であり、聖徒たちのために熱心に奉仕してくれました。あなたがたも、このような人たちに、また、ともに働き、労苦しているすべての人たちに従いなさい**」。

ステファナの一家は、「アカイアの初穂」と呼ばれているように、コリント教会の初期に救われた家族です。パウロから直接、洗礼を受けた数少ない人たちです。この家族は、「聖徒たちのために熱心に奉仕した」のです。ここでの「奉仕した」という言葉は、「ディアコニア」という言葉が使われています。教会の役員である「執事」は、「ディアコノス」と呼ばれますから、この一家はコリント教会の「執事」のような存在だったのでしょう。彼らは、教会の貧しい人たち、病人たちに熱心に仕えたのです。

彼らは、教会の初期に救われた古株でした。ですから信仰歴も長かったのでしょう。しかし彼らは、自分たちが初期に救われた者だからと先輩風を吹かせて、教会に権力を持つことはしませんでした。そうではなく彼らはむしろ、教会の弱い人たちを大切にして、彼らに仕える働きをしたのです。パウロは、このような人たちとともに働き、このような人たちに従いなさいと言っています。またステファナは、17-18 節にあるように、パウロのもとを訪ねた一人に名前が挙げられていますが、パウロは「**このような人たちを尊びなさい**」と言っています。この「尊びなさい」というのは、「重んじなさい」「労をねぎらいなさい」という意味です。これらの人たちはおそらく教会の「執事」たちだったのでしょう。

パウロは、「ディアコニア」と呼ばれる、教会の貧しい人たち、病人たちに仕える奉仕を、ステファナの一家のような人たちだけに任せておくのではなく、彼らと共に働いて彼らを助け、彼らに従いなさい、また彼らを重んじなさいと言うのです。

ここから教えられることは、教会全体は、執事たちと一緒に、あらゆる弱さを覚えている人たちに仕えて、執事たちを助け、執事たちに従い、執事たちを重んじなければならないということです。執事就職式の時に、教会はこのように誓約することが求められます。「**この兄弟姉妹は、今、執事として、主よりあなたがたに遣わされました。あなたがたは、この兄弟姉妹たちを、その務めにふさわしく尊敬し、励まし、主にあつてこの兄弟姉妹に従うことを約束しますか**」。教会全体は、執事たちの働きを感謝し、尊敬し、励まし、従うことが大切なのです。

#### 4. パウロのあいさつ

さて最後に、パウロに注目したいと思います。パウロはこの手紙の最後の勧めとして、13-14 節でこう言っています。「**目を覚ましていなさい。堅く信仰に立ちなさい。雄々しく、強くありなさい。一切のことを、愛をもって行いなさい**」。

「目を覚ましていなさい」というのは、イエス様がこの地上に再び来られることを待ち望む姿勢です。私たちは、この世が永遠に続くと考えて生きるのではなく、必ず「終わり」が来る、イエス様がこの地上に再び来られて最後の審判をなされる時が来る、私たちの救いが完成する時が来ると信じて生きていかなければなりません。私たちは普段、何気なく平和に

生活していると、「世の終わり」のことを忘れてしまいます。つまり靈的に眠ってしまいます。しかし、私たちは必ず「終わり」が来ると、信仰の目を開いていなければなりません。「今」がすべてかのように生きるのではなく、「終わり」を見据えて「今」を生きなければなりません。その時まで私たちは、堅く信仰に立たなければなりません。最後まで、信仰を守り通さなければなりません。

私たちは、信仰の目で物事を見る時、「雄々しく、強くある」ことができます。今見える現実だけを見ると、私たちは弱く恐れおののき、あらゆることに不安を覚えてしまいます。しかし神様の御言葉の約束に堅く立ち、信仰の目で現実を、また未来を見ていく時、私たちは力強く歩むことができます。

しかし私たちは、「強さ」だけでなく、「愛」を身につけなければなりません。パウロはこの手紙で、「愛」がなければ、すべては無意味だと教えています。「愛」のない「強さ」は、何の意味もなく、何の役にも立ちません。私たちは、「愛」に基づく「強さ」を身につける必要があるのです。

私たちは、終わりの時の「希望」を持ち、「信仰」の目を開いて強さと同時に「愛」を持っていくことが求められているのです。まさにいつまでも残る「信仰と希望と愛」に生きること、これが私たちクリスチャンに求められていることなのです。

パウロは、21-24 節にこの手紙の最後にあいさつを書きます。「**私パウロが、自分の手であいさつを記します。主を愛さない者はみな、のろわれよ。主よ、来てください。主イエスの恵みが、あなたがたとともにありますように。私の愛が、キリスト・イエスにあって、あなたがたすべてとともにありますように**」。パウロは最後に、呪いの言葉を語ります。コリント教会には、様々な問題がありましたから、最後に強い警告を与えたのかもしれませんが。しかし大切なことは、「主を愛すること」です。イエス様が再びこの地上に来られる時、イエス様を愛さない者には「呪い」があり、イエス様を愛する者には「祝福」があるのです。

パウロは、呪いの言葉を語ると同時に、「私の愛が、キリスト・イエスにあって、あなたがたすべてとともにありますように」と、コリント教会への「愛」を語ります。パウロが、この最後の挨拶で語ることは、「主を愛すること」と「隣人を愛すること」です。これが「主よ、来てください」という「終わりの時」までに、私たちが大切にすべきことなのです。私たちは、イエス様がこの地上に再び来られる時まで、イエス様を愛し、隣人を愛することが求められているのです。

## **おわりに**

私たちはいつでも、イエス様がこの地上に再び来られる「終わりの時」を見据えて生きることが大切です。その時まで私たちは、いつまでも残る「信仰と希望と愛」に生きることが大切です。またその中でも一番すぐれている「愛」に生きることが大切です。イエス様を愛すると同時に、教会役員を支え、あらゆる弱さを持つ人たちに仕え、互いに愛し合って、隣人への愛に生きていくことが、私たちに求められていることなのです。

天におられる私たちの父なる神様。

2017年から少しずつ学んできた「コリント人への手紙第一」を読み終えることができ、感謝します。教会には、昔も今も多くの問題が起こります。しかし私たちは、終わりの時の「希望」を抱き、「信仰」をもって物事を捉え、イエス様への「愛」と隣人への「愛」に生きることができますように。

この祈りを私たちの救い主イエス・キリストの御名によって祈ります。アーメン。